

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

終末的希望

―マルコ伝13章―

1965年5月9日

小池辰雄

霊殿 審判と救済 終末的希望 言つ者は聖霊なり 逆らいの事態 有機体的構造 神の国の保証 荒らす憎むべき者 その日その時 実言は実現 神秘の世界

【マルコ13・1〜37】

1 イエス宮を出で給うとき、弟子の一人いう『師よ、見給え、これらの石、これらの建造物、^{たてもの}いかに盛んならずや』² イエス言い給う『なんじ此等の大なる建造物を見るか、一つの石も崩されずしては石の上に残らじ』

3 オリブ山にて宮の方^{むか}に対して坐し給えるに、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ^{ひそか}窃に問う、⁴ われらに告げ給え、これらの事は何時あるか、又すべて此等の事の成し遂げられんとする時は、如何なる兆^{しるし}あるか』⁵ イエス語り出で給う『なんじら人の子に惑わされぬように心せよ。⁶ 多くの者がわが名を冒し来り「われは夫なり」と言いて多くの人を惑わさん。⁷ 戦争と戦争の噂とを聞くととき懼るな、斯る事はあるべきなり、然れど未だ終にはあらず。⁸ 即ち「民は民に、国は国に逆らいて起たん」また処々に地震あり、饑饉あらん、これらは産の苦難の始なり。

9 汝等みずから心せよ、人々なんじらを衆議所に付さん。なんじら会堂に曳かれて打たれ、且わが故によりて、司^{つかさ}たち及び王たちの前に立てられん、これは証^{あかし}をなさん為なり。¹⁰ 斯て福音は先ずもろもろの国人に宣伝えらるべし。¹¹ 人々なんじらを曳きて付さんとき、何を言わんと預^{あらか}じめ思い煩うな、唯^{ただ}そのとき授けらるることを言え、これ言う者は汝等にあらず聖霊なり。¹² 兄弟は兄弟を、父は子を死にわたし、子らは親たちに逆らい立ちて死なしめん。¹³ 又なんじら我が名の故に凡ての人に憎まれん、然れど終まで耐え忍ぶ者は救わるべし。

14 「荒らす憎むべき者」の立つべからざる所に立つを見ば（読むもの悟れ）その時ユダヤにおる者どもは、山に遁れよ。¹⁵ 屋の上におる者は、内に下るな。また家の物を取り出さんとして内に入るな。¹⁶ 畑におる者どもは上衣を取らんとて帰るな。¹⁷ 其の日には孕^{みごも}りたる女と、乳を哺^{のま}する女とは禍害^{わざわい}なるかな。



18 この事の、冬におこらぬように祈れ、¹⁹ その日は患難の日なればなり。神の万物を造り給ひし開闢より今に至るまで、斯る患難はなく、また後にもなからん。²⁰ 主その日を少なくし給わずば、救わるる者、一人だになからん。然れど其の選び給ひし選民の為に、その日を少なくし給えり。²¹ 其の時なんじらに「視よ、キリスト此処にあり」「視よ、彼処にあり」と言う者ありとも信ずな。²² 偽キリスト・偽預言者ら起こりて、徴と不思議とを行い、為し得べくば、選民をも惑わさんとするなり。²³ 汝らは心せよ、預じめ之を皆なんじらに告げおくなり。

²⁴ 其の時、その患難ののち、日は暗く、月は光を発たず。²⁵ 星は空より隕ち、天にある万象、震い動かん。²⁶ そのとき人々、人の子の大なる能力と栄光とをもて、雲に乗り来るを見ん。²⁷ その時かれは使者たちを遣わして、地の極より天の極まで、四方より、其の選民をあつめん。

²⁸ 無花果の樹より譬を学べ、その枝すでに柔らくなりて葉芽めば、夏の近きを知る。²⁹ 斯のごとく此等のことの起こるを見ば、人の子すでに近づきて門辺にいたるを知れ。³⁰ 誠に汝らに告ぐ、これらの事ごとく成るまで、今の代は過ぎ逝くことなし。³¹ 天地は過ぎゆかん、然れど我が言は過ぎ逝くことなし。³² その日その時を知る者なし。天にある使者たちも知らず、子も知らず、ただ父のみ知り給う。³³ 心して目を覚ましおれ、汝らその時の何時なるかを知らぬ故なり。³⁴ 例えば家を出づる時その僕どもに権を委ねて、各自の務を定め、更に門守に、目を覚ましおれと、命じ置きて遠く旅立ちしたる人のごとし。³⁵ この故に目を覚ましおれ、家の主人の帰るは、夕べか、夜半か、鶏鳴くころか、夜明けか、いずれの時なるかを知らねばなり。³⁶ 恐らくは俄に歸りて、汝らの眠れるを見ん。³⁷ わが汝らに告ぐるは、凡ての人に告ぐるなり。目を覚ましおれ』

● 霊殿

「イエス宮を出で給うとき、弟子の一人いう『師よ、見給え、これらの石、これらの建造物、いかに盛んならずや』」

キリストが宮の境内から出て行かれた。エルサレムの神殿は大きい。これは「第三神殿」です。紀元前20年位からヘロデ大王が起工して、かれこれ半世紀もかかって出来上がったところの大きなものです。

「第二神殿」というのは、エルサレムがバビロニアに陥落させられて荒廃に帰して、その後で紀元前515年に建てたのが第二神殿です。その三番目の神殿です。とにかく非常に豪壮なものですから、弟子の一人が



「先生、ご覧なさい。これらの石はなんと大きな石でしょう。なんと大きな建物でしょう」

と言った。高層建築です。ヨーロッパに行きますと、バチカンをはじめ教会堂は実に堂々たるものです、横にもまた縦にも。ロマネスクまたゴシックの建物ですね。ロマネスクの方は横に広い。バチカンはそちらの方です。ケルンのドームはゴシック式です。ギリシャの方へ行けば、パルテノンの大きな神殿もそうです。よくもこんな大きなものをどうやって建てるんだろうと思うくらいに、本当に摩天楼の——「天を摩する」という。ドイツ語では「雲をひつかく」という言い方ですが——大きな建物で、あれでもつて宗教的な何ものかに威圧されるわけです。その中に入ると、宗教的な雰囲気がおのずからくる。伝統的にそういうようなわけです。もちろん、小さな教会もある。小さいと言っても、こちらよりもだいぶ大きい。田舎に行けば、本当に小さいものもあるけれども。

その代表的な神殿に驚嘆して、そして、

「いと盛んな宗教の姿だ」

と。こちらでも、随分大きなお寺さんがある。仏教にかぎらず、他の新興宗教でも大きな殿堂を造るわけです。しかし、それは本当の宗教の世界とは言えない。いわゆる宗教であっても、真の信仰の世界とはちよつと違う。そのことをキリストは端的に言われたわけです。

² イエス言い給う『なんじ此等の大なる建造物を見るか、一つの石も崩れずしては石の上に残らじ』

と。それは一つは、エルサレムの滅亡の預言でもあるわけです。70年にローマの兵火にかかって、ダメになってしまった。

けれども、神殿宗教は崩壊しても、本当の霊殿は建つ。キリストが復活なされば、もはや不滅の霊殿です。イエス・キリスト自身が活ける神殿として地上を歩いていらつしやつたんですから。これは霊殿宗教である。キリストのは、いわゆる神殿宗教ではない。もちろん、「神殿」という言葉は、言葉の本来の意味では、霊殿と同じことですが、いわゆる建物の神殿ではない。

「神」という字はおもしろい字です。「申」という字は雲形なんです。雲を雷が、電光が貫いている姿がこの「申」です。「示」は、そういったものが示されたもの、啓示、神示。

だから、「神」は本来、雲を貫いて、電光のごとく臨む。臨み方が電撃作戦だね、神さまは。パウロは正に、キリストの電撃作戦に遭つて、この神の字そのものがパウロには展開したわけです。そういう意味においては、本当の神殿です。雲を突破して、雲霧を突破して、この地上の暗黒を突破して、光が、靈光が臨む姿を「神」というんだから、やはり中国の漢字は素晴らしい。

だから、

「こんなものは壊れてしまふよ」



と。「しかし、壊れないものがある」ということはおつしやらない。今、この13章でキリストがおつしやろうとしていることは、「終末」ですから、世の終りですから。

●審判と救済

³オリブ山にて宮の方^{むか}に對^{むか}いて坐し給えるに、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ^{ひそか}竊^{ひそか}に問う、

一番親々のお弟子さんたちが訊^{たず}ねた。イエスはオリブ山で神殿の方に向かって坐っておられる。そういう絵もあるけれども。

⁴われらに告げ給え、これらの事は何時^{いつ}あるか、又すべて此等の事の成し遂げられんとする時は、如何^{いか}なる兆^{しるし}あるか』

「此等の事」というのは、エルサレムを中心とした審判です。

⁵イエス語り出で給う『なんじら人の子に惑わされぬように心せよ。⁶多くの者わが名を冒^{おか}し来り「われは夫^{それ}なり」と言いて多くの人を惑わさん。

例えば、使徒行伝8章のシモンみたいなやつです。

「われはそれなり」

というのは、原語的な言い方では、

「私である」

という、出エジプト記3章のあのヤーヴェーの

「我在り」

という言い方と同じです。

⁷戦争と戦争の噂^{うわさ}とを聞くととき懼^{おそ}るな、斯^{かか}る事はあるべきなり、

この「あるべきなり」の「べき」がまた強い「べき」で、

「どうしてもそういうことが起きるぞ」

ということ。イザヤ書19章2節に、

「²我エジプト人をたけび勇ましめてエジプト人を攻めしめん。斯てかれら各自その兄弟をせめ、おのおのその隣をせめ、邑^{まち}は邑をせめ、国はくにを攻むべし。」(イザヤ19・2)

と、こういった戦争が起きるという。

まあ、20世紀の現在、相当、世界的情勢がおかしいですね。

「来年は世界の一つの危機である」

と言う人があるし、また少し先走っている極端な人は、

「世の終りだ」

なんてことを言う人もあるが、そんなことには惑わされなくていい。しかし、とにかく、ある意味において、危機的である。終末的な様相が表れているということは言えるわけです。



我々は、ここに出ていような現実がよく想像できるといふところに今あるわけなんで、今日非常に平穩であるかと思うと、もう明日はそれが火の海に化するということが現代の戦争では、もうお伽話ではなくて現実に来るんですから。恐ろしい現実です。

然れど未だ終にはあらず。8 即ち「民は民に、国は国に逆らいて起たん」また処々に地震あり、饑饉あらん、これらは産の苦難の始なり。

これはゼカリヤ書14章のところを見ると、

「4 その日にはエルサレムの前に当たりて東にあるところの橄欖山の上に彼の足立たん。而して橄欖山その真中より西東に裂けて甚だ大なる谷を成しその山の半は北に半は南に移るべし。5 汝らは我が山の谷に逃げいらん。その山の谷はアザルにまで及ぶべし。汝らはユダの王ウジヤの世に地震を避けて逃げしごとくに逃げん。我が神エホバ来りたまわん。諸々の聖者なんじともなるべし。6 その日には光明なかるべく輝く者消えうすべし。7 ここに只一日あるべし。エホバこれを知りたもう。是は昼にもあらず、夜にもあらず、夕暮の頃に明るくなるべし。8 その日に活ける水エルサレムより出でその半は東の海にその半は西の海に流れん。夏も冬も然あるべし。9 エホバ全地の王となりたまわん。その日には只エホバのみ只その御名のみにならん。」(ゼカリヤ14・4〜9)

その終末の審判と共に或る一つの終末的な救いの希望も述べられているわけです。まだ、ハガイ書にもあるし、ヨエル書にも出てくるし、エレミヤにも、イザヤにももちろんあるが、預言者はほとんどどれも、終末に関する音信を必ず語っていると言っている。激しい神の審判はどうしてもそこに世の終りを来たらせるような性格をもっている。

けれども、神さまは審判せんがために審判するのではなくて、それを大きな救済にもつていく。審判と救済は裏腹をなしている。ですから、終末的審判のあとに、終末的な国、希望が掲げられるわけです。アモスなんていうのはほとんど審判ばかり言ってますが、それでも、チラチラと希望がそこに言われています。

●終末的希望

9 汝等みずから心せよ、

「注意して見てろ」ということです。

人々なんじらを衆議所に付さん。

ユダヤ人の衆議所です。

なんじら会堂に曳かれて打たれ、且わが故によりて、司たち及び王たちの前に立てられん、これは証をなさん為なり。10 斯て福音は先ずもろもろの国人に宣伝えらるべし。



この「べし」も強い「べし」です。

そういった饑饉、地震、戦争というような産みの苦しみがくる。これはみな神さまのなさるところである。審判を、そういう意味において、なさるところのものである。それを招くものは実は人間の方である。神さまは、審こうと思うわけではないけれども。

どういう現実^{あかし}にひっぱり出されましても、クリスチャンの為すべきことは証である。

「福音を宣べ伝えるべし」

ということ。福音の証である。時が迫れば迫るほど、地上に希望がなくなればなくなるほど、世の中が混沌とすればするほど、反対に、氣落ちせずして、キリスト者は福音を宣べ伝え、証しなければいかんということです。

「もうどうせ、福音を伝えても、どうにもならんから」

と言って、閉じこもることはいかん。どんなにそれが実を結ばないように見えても、言うべきことを言い、為すべきことを為していく。どうでもいいような現実^{そらばん}に本当に生きる人が、却って深く天国を、神の国を希望する人です。終末の希望をもつ人こそ逆に、計算の合わないことをやっていく。この世で算盤^{そろばん}を合わせ、計算を合わせようとする人は、

「もうこの辺でやめた」

と言って、いい加減で放り出してしまいうわけですが、神の国への終末の希望をもつ人は、どんな現実であっても、誰に認められなくとも、どんなに迫害されても、逆らわれても、福音を伝えていく。かくあらざるを得ない。それが本当の希望をもつ人の在り方なんです。ルターの『卓上語録』の中にも多分あったと思いますが、

「もし明日、もう世の終りということが分かったらどうするかと問われたら、私は

林檎^{りんご}の苗を植えると答える」

と。そういうような具合に、この地上が崩れていつても――林檎の苗を植えたって、明日までに実が捻りはしない――結果が絶望的であっても、なお為すべきことを為す。善きことをしていく。そういうところに、この終末的希望を本当に生きる人の実存があるわけです。この世を非常に問題にする人よりも、

「この世はどうでもいい。もう、どうにでもなれ」

と言う人が実は、この世において最も正しい、また激しい生き方をしていく。これが福音を身につけている人の在り方です。

「福音は先ず諸々の国人^{くにびと}に宣べ伝えられるべきである」

と。この「べし」は、

「そうしないではいられないものである、絶対にそうである」

という「べし」です。そうでなかったら、神の国は来ない。

「神の国は、神の国を来たらせる実存者がいなかったなら、神の国は来ない。おあずけだ」



と、こういうわけです。

●言う者は聖霊なり

11 人々なんじらを曳^ひきて付^つきさんと、何を言^いわんと預^あらめ思い煩^{わづ}うな、唯^{ただ}そのとき授けらるることを言え、これ言う者は汝等にあらず聖霊なり。

「さあ、そうなったら、何と言おうか。こういう場合には、どういように出ていこうか」

と、いろいろなケースを考えて準備する。そういうのはこの世の知恵である。普段からしつかり行動もせず、普段からしつかり祈りもしないで、

「その時になつたら聖霊が教えてくれる」

なんて、そうはいかんですよ。普段の在り方が、即ちいつも聖霊において行動し、聖霊においてものを言うこと、これがやはり大事です。御霊の事態が身についていれば、その時にあわてない。

それはいつも己を棄てた場です。棄^す私^{わが}であり、無^む私^{わが}である。自己というものを棄ててしまう。自分を与える。この場合の自分というのは、わが中にあるところのもの、キリストの名によつて歩いているところの、キリストの名を宣言するところの事態です。

「我^{われ}を否^{いな}む者は、父の前で我^{われ}もまた汝^{なんぢ}らを否^{いな}む。我を表す者は天国において祝福される」

と、キリストは言われましたが、聖霊が身についているならば、聖霊を宿しているならば、何ももうたえることはない。

「汝らの中で語るのは聖霊なり」

というわけです。

どういふところにお勤めをしても、いつでも辞表が出せるだけの、辞表を懐に入れているだけの気合でもつていかなければ、本当の仕事はできない。「辞表をいつでも出せる」ということは、「己を棄てている」という角度です。そのときに、はつきりとしたことが言えるわけです。言葉を左右にしない。真理をはつきりと言う。

12 兄弟は兄弟を、

「クリスチャンはクリスチャンを」

と言ったっていい。偽クリスチャンが本当のクリスチャンを、正統クリスチャンが異端としているようなクリスチャンを。

父は子を死にわたし、子らは親たちに逆らい立ちて死なしめん。

そういうようなことが、そういつた非常な場合には起きてくるという。宗教的ないがみあいというものが昔からありました。



●逆らいの事態

13 又なんじら我が名の故に凡ての人に憎まれん、然れど終まで耐え忍ぶ者は救われるべし。

マルコ伝13章13節は非常に大事な節です。「耐え忍ぶ」というのはギリシャ語で、「留まりぬく」という字です。終りまで留まりぬく者は、それは救われる。

「我が名の故に凡ての人に憎まれん」

という。キリストの言葉は激しい。昨日まで友だちだと思っていたやつが、自分を憎むということもある。

「ブルータス、お前もか」

というような調子ですよ。

キリストは、^{すべて}全ての者に憎まれたから、こういうことを言われたんです。イエス・キリスト自身が全ての人に憎まれて、弟子からもうとうとう棄てられて、独り十字架につかれた。極限の現実をキリストはちゃんと目の前に見ておれる。やがてこれは十字架です。そういう私だと。そういった十字架の私を受けとれば、

「私と一緒にこの十字架の側に立つか、然らずか」

のどっちかなんだ。

「我が名の故に凡ての人に憎まれん」

というのは、

「本当に十字架の側に立つならば、私と同じことになるぞ、凡ての人に憎まれるぞ」

ということですよ。

ところが、キリストを迫害し、背いた人たちが今度はキリストを拝むわけだ。今度は、

「キリストはすべての人に拝まれん」

ということになる。

「預言者は、生きているうちは蹴たおされて、死ぬと拝みたおされる」

なんていう言葉がある。預言者中の最大の預言者キリストは、蹴たおされて、とうとう十字架にかかるが、逆に今度は、拝みたおされる。すべての人になぜ、拝みたおされるかなぜ、拝まれるか。

すべての人に憎まれながら、すべての人を愛するからです。すべての人を愛する徴がこの十字架なんだ。十字架は、愛の事実なんだ。天上天下ただ一つしかないところの愛の事実なんだ。

「アガペー」

という言葉があるけれども、十字架のアガペーはそんなたやすいアガペーではない。それほどまでに、福音の事態は生まれつきの人間には逆らいの事態なんだ。前に、

「言い逆らいの徴」



というのをやりましたね。

「この子は言い逆らいの徴となる」

と、もうキリストが誕生したときに預言されてしまった。

「クリスチャンというのは、なんだかどつつきがわるい。考えることがちよつと、

現代と妥協しなくて」

なんて、煙つたがられるわけです。一般には、

「文化的キリスト教はいいけれども、原始福音は、原始のキリスト教はちよつと激しすぎて、現代に合うようなキリスト教にすれば、それはいいよ」

というようなわけでしょうが。

けれども、私たちはこの一番生まのイエス・キリストの、また使徒たちが伝えるこの福音の中に水を割らずに入っていく。そうすると、これは躓きですから。この激しく躓きであるところの事態が実は、最も広く包摂するところのものを持っているんです。

けれども、これが分からない。これが分からないで、何か非常に狭隘な福音に、キリスト教に取り違えをする人もあります。それではダメです。また、水を割ったような文化的キリスト教も何もならない。それから、妙に凝り固まったような、人を審きぬいていくような、そういったパリサイ的なキリスト教は、これはキリスト自身がそのパリサイが大嫌いなんだ。

「すべての人に憎まれん」

というイエス・キリストが逆に今度は、ものすごく激しく一切を包摂していくものを持っているという、この事態です。この福音の性格といいますが、構造といいますが、これが身につかないと本ものにならない。

●有機体的構造

イエス・キリストの言葉を並べてごらん下さい。矛盾する言葉がたくさんある。これは並べてはいかん。それぞれの言葉がキリストという驚くべき、把握することのできない鴻大な福音体の構成因子をなして、それぞれの役割を果たしている言葉なんです。これを一つぬいてしまうと、それだけ有機体的構造がぬけるようなことです。決して論理的構造でキリストの言葉を説明することはできない。その場に来て、イエス・キリストのその言葉はまさに真理であって、これをつかめなければ、

「幸いなるかな、柔和なる者」

なんていう言葉がつかめないということです。

「平和ならしめる者」

なんてな言葉がつかめない。「平和ならしめる者」ということを本当につかむとまた、

「すべての人に憎まれん」



という言葉がまたつかめる。そういうものです。わかりますか。そういうような質^{たち}のものですので、どうか、皆さんはおそれなく受けとって進んでください。

「そうか、すべての人に憎まれては困るではないか。私はもう少し平和に行きたいんだけど」

なんて、そういうように比べてしまったら、このキリストの言葉は矛盾してしまうんだ。一步も退くことのできない真理を主張するために、それを守るために、すべての人に憎まれる。私は、たとえば、聖霊のこの事態を、原始の福音の事態を貫いてきたらば、無教会のすべての人に憎まれた。体裁上は、憎んでないような顔をしているけれども、実はみんな私に線を引いている。これは即ち、

「汝らは、我が名の故にすべての人に憎まれん」

ということ。本当にキリストの中に入ってみたらば、今まで友だちと思っていたクリスチャンのすべてから憎まれた。ありがたい。

「イエス・キリストの御言に従っていたら、福音の中に入ってきたら、私もこの13節が少し自分のものになってまいりました」

と、私は感謝しているわけです。あなた方がその道を一緒に行ってくださいるわけです。また、虚心坦懐にこの福音を伝えていけば、真理に対して本当に謙虚な人は、

「そうだ」

と、却ってクリスチャンでない人が本当の返事をする。しかし、それでも、なかなかその世界までは入って来ませんけれどもね。

私は結婚式の披露宴のときでも、何かテーブルスピーチをさせれば、まず福音の宣伝から始まる。

「我々のはそこらのは違う。何も自分をいばるわけではないけれども、キリスト教を取り損なっては困る。今こそ、この文化の一番根底に日本人はこれを受けなくてはいいかん」

ということを、私はどの場合でも言ったつもりです。それはやはり、言うべき時に、キリストの御名を隠してはいかん。そうやって、真理に立って公明に、人々をこの喜びの世界になんとかして入れてあげたいという念願をもって語るときには必ず響く。

「俺たちは偉いクリスチャンなんだ」

なんて思っ語ってごらんさい。決して響かない。反感をきたす。けれども、

「本当に何とかしてこの世界に」

といって悲願をもって語るところには、それは響くんです。

「そういうことなら、もつと早くから聞きたかった」

なんてことになっちゃう。

●神の国の保証

「汝ら、我が名の故にすべての人に憎まれん。懼れるな」

と。本ものは、まず憎まれる。けれども、それは本当に彼らがその逆らいのあとから、

「悪かった。いや、これはやつぱり本ものだった」

と気がつく。

「やつぱり、彼は神の子であった」

とあの百卒長が言ったでしよ、十字架のキリストを見て。だから、

「いくら憎まれても心配はいらん」

ということ。決して、孤独のための孤独でもない。実は、憎まれながら逆に、真理をもって相手を支え、相手を担っている。相手を愛している。

終りまで——終末まで、神の国が来るまで、再臨の時まで——耐え忍ぶ。この「終りまで」というのは、究極の意味ではそうですよ、自分の生涯の終りばかりではない。キリストや使徒たちは、もう神の国は間近と思つて語っている。「それはいつだ」ということは分かりませんけれども、とにかく迫っているということは間近に感じていた。私たちも呑気な顔をしてはいいかん。神の国の迫りというものを、質的にはいよいよ強く受けとつていく。

「神さま、明日にも新天新地を現象してください」

というような希望を、終末の希望をもつて生きていく。明日にも終末を来たらせるといふ、この魂のはりです。それは我々の心の中に、魂の中に、胸の中に

「神の国は汝らの中にあり」

という、神の国が来ているから、本当に激しく終末を希望することができる。しかも、あせらない。激しく強く希望しながら、しかも、あせらない。そういった境地は、いわゆる現実主義でもなければ、いわゆる理想主義でもない。現実も理想も両方ともちゃんと持つてしまうものがこの福音の現実なんです。

だから、天国は既に来ている。来ているんですよ、御霊を持っている人は。そして、神の国はそれが故に、ここに神の国の保証があるから、必ず来ると確信して祈ることができる。希望することができる。単なる願望、空想、瞑想ではない。

だから、終りまで耐え留まるということが出来る。もし、終りまで忍ぶことができないならば、その人は本当の信を持たず、本当の希望を持たないわけです。

「然れど終まで耐え忍ぶ者は救われるべし」

というのは、私は大好きな句です。どうなつても大丈夫だと。キリストが私たちの中で、御霊と御言をもつて確証してくださっているから、どう思われても大丈夫でございしますと。

私たちはお互いに、「実存、実存」というようなことを言つて、

「あれはどうも信仰的になつちよらん」

だとか、そういうことを言つて人を審いてはいかん。どこまでも、大きくそれを包んで、



「あの人はゆつたりしているけれども、やっぱり、あのゆつたりしている中に本当に凄い力をもつて、自分を救いの世界に引き上げていているな、引き寄せているなあ」ということを感ずるような事態になってくる。そして、

「ああ、あの人は性急に判断して、集会から出て行ってしまったけれども、まあ、気長に見てみましょう」

と。その人はいろんなことにぶつかって、

「やっぱり、どうも自分はまちがっていた」

と言って、戻って来るかもしれないし、戻らなくても、その場所にあつて、とにかく本当のところに立ち帰るために、私たちは祈ることができるわけです。どうけなされて、どうされましても、なおその奥に一番どん底の、また一番高次な世界に私たちは自分をどしどし入れていかなければ、いろいろな事態にぶつかってグラグラになってしまうよ。

●荒らす憎むべき者

13 又なんじら我が名の故に

キリストの御名の故に。御名は実ですから、わがこの実名の故に、霊名の故に、

凡ての人に憎まれん、然れど終まで耐え忍ぶ者は救わるべし。

14 「荒らす憎むべき者」の立つべからざる所に立つを見ば(読むもの悟れ)

この「荒らす憎むべき者」というのは、ダニエル書9章27節のところに出てくる言葉です。これはアンティオコス・エピファネスというやつのことを、名前を隠してダニエルが書いたわけです。これはゼウスの神を祀^{まつ}って、ヤーヴェーの信仰をユダヤ人から剥奪しようとしたやつです。

「²⁷彼一週の間、衆多^{おおく}の者と固く契約を結ばん。而して彼その週の半ばに犠牲^{いけにえ}と供物を廃せん。また残暴可惡者^{あらずにくむべきもの}羽翼^{つばさ}の上に立たん。斯てついにその定まれる災害残暴るる者の上に注ぎくだらん。」(ダニエル9・27)

と。ダニエル書というのは黙示文学ですから。9章24節を見ますと、

「²⁴汝の民と汝の聖邑^{きよきまち}のために七十週を定めおかる。而して惡を抑え罪を封じ^{おさ}とが^{とが}を贖い、永遠の義を携え入り、異象と預言を封じ、至聖者に膏を灌^{そそ}がん。²⁵汝曉^{さと}り知るべし、エルサレムを建てなおせという命令の出づるよりメシヤたる君の起くるまでに七週と六十二週あり。その街と石垣とは擾乱^{じょうらん}の間に建てなおされん。」(ダニエル9・24、25)

と言って、審判とそのあとの救済のことが、「永遠の義」というような言葉がありましたから、ちよつと今読んでみたわけです。キリストに関わる預言とみていい。

そういう「荒らす憎むべき者」とは、この場合はローマの皇帝のことになる。アンティオコス・エピファネスというのは紀元前16年に偶像をここに建てた。



「荒らす憎むべき者の立つべからざる所に立つを見ば」
というのはそのことです。

その時ユダヤにおける者どもは、山に遁れよ。

そういう異教的なものがやってきて、荒らしたらば、

¹⁵屋の上における者は、内に下るな。また家の物を取り出さんとて内に入るな。

¹⁶畑における者どもは上衣を取らんとて帰るな。

よく、火災や何かで物を取りに戻って逆に自分が焼け死ぬということがありますが。

●その日その時

¹⁷其の日には孕りたる女と、乳を哺する女とは禍害なるかな。¹⁸この事の、

冬におこらぬように祈れ、¹⁹その日は患難の日なればなり。神の万物を造り

給いし開闢より今に至るまで、斯る患難はなく、また後にもなからん。²⁰主

その日を少なくし給わずば、救わるる者、一人だになからん。

「その日」という字はみんな複数形なので、その患難の禍害の臨んでいる日が長ければ、みんな本当に滅亡してしまうから、それで、

「主その日を少なくし給わずば」

と言ったわけです。

然れど其の選給いし選民の為に、その日を少なくし給えり。²¹其の時なん

じらに「視よ、キリスト此処にあり」「視よ、彼処にあり」と言う者ありとも

信ずな。²²偽キリスト・偽預言者ら起りて、徴と不思議とを行ひ、

まじわぎ的なことをやるわけです。

為し得べくば、選民をも惑わさんとするなり。²³汝らは心せよ、預じめ之を

皆なんじらに告げおくなり。

²⁴其の時、その患難ののち、日は暗く、月は光を発たず。

これはエレミヤ記4章にも同じようなことが書いてある。また、イザヤ書13章にも。

²⁵星は空より隕ち、天にある万象、震い動かん。

これはペテロ書にも出てます。

²⁶そのとき人々、人の子の大なる能力と栄光とをもて、

これはダニエル書7章12、13節のところですよ。

雲に乗り来るを見ん。²⁷その時かれは使者たちを遣わして、地の極より天の

極まで、四方より、其の選民をあつめん。

世は混沌としてくると、そういつたいいわゆるデモニッシュな人物が働きたして、とやか
くいろいろなことを言います。

いろいろな現実を、火の下、水の荒れ狂う中をなお突破して、神の国を新しくそこに現



ずることのできる生命力は正に靈生である。靈生的なキリスト者、キリストの靈に生きる場所の、御靈に生きるところのキリスト者です。私たちがいつもその生命を本ものにするために必要な要素は、ただこの祈りと、それから御言をしつかり身につけていること。聖書の言葉を祈りをもって真に身につけている。このことです。そのときには、惑わしに合わない。

しかし、ここにかかってくる場所の驚くべき現実の前兆的なものは、こないだの広島や長崎における原子爆弾のかの事態や、それから、いろいろな空襲で非常に悲惨な事態に、私たちは出つくわしてきたわけです。昨日も、或る人とお話した。その人はちょうどあの広島原爆の全くその前夜に、

「一家を携えて東京の方に出てきた。これは何もそんなことは知らないで、とにかく出てきた。親戚の者はみんな参っちゃった。私たちだけ助かった」

と。それから、そのことを聞いて大急ぎで引き返したら、まあ本当に今でも目にちらつくような恐ろしい現実だったということをつぶさに聞きました。

普通の生活でも、非常に忙しくて疲れてしまったり、いろいろな仕事上のことで躓ききたしたり、あるいは対人関係で妙なことになるってみたい、いろいろなことが我々の現実にはあるわけです。

けれども、どうか、そういったいろんな試みや何かに出つくわしたときに、私たちが決して、その環境や条件というものによって因果関係で何かものを考えて判断して、それからその先をどうやっていこうなんていうようなことではなくて、いつも、そういった事態は、神さまが私たち一人びとりをそのような事態を通して、本当にキリストの靈生に迫りやり、キリストの靈生の実存者として鍛えて上げてくださっているという、この一点をしつかりと自分の身に、魂に置いて、そして進んで行くことです。

それをしなかったならば、どんなに善きそうでも、決して本当の神の民とはならない。これをしていけば、いろんなことに出つくわせば出つくわすほど、その人は本当に鍛え上げられていく。

「艱難汝を玉にす」

と言うけれども、本当に靈玉となしていく。

「一切のことは私たちに働きて善となる」

とは、「聖となる」と言ってもいい。一切のことは働いて私たちを聖徒としていく。キリストの聖徒としていく。神の恵みが、サタンの働きの奥に、最後になおキリストの働きのいとも来ている。それを信じ、つかまえぬき、つかまえられぬいて行こうと。これが本当に、

「終りまで留まりぬく」

という、キリストのもとに留まりぬく、聖靈を宿しぬくということです。キリストがここでおっしゃっているところの、終末的な審判の、天地がひっくり返るような現実が来まし



でも、その時に私たちが本当にその現実をもう一つ奥の、もう一つ高い現実において、これに処していくことができる。そういうクリスチャンでありたい。そのためには、日常の現実において、いつも質がそのように鍛えられていくのでなかったならば、とうてい非常の時に処していくわけにいかない。そのためには、どこまでも、常に祈りを深くしていくことです。

●実言は実現

28 無花果の樹より譬を学べ、その枝すでに柔らかくなりて葉芽めば、夏の近きを知る。29 斯のごとく此等のことの起こるを見ば、人の子すでに近づきて門辺にいたるを知れ。30 誠に汝らに告ぐ、これらの事ごとく成るまで、今の代は過ぎ逝くことなし。31 天地は過ぎゆかん、然れど我が言は過ぎ逝くことなし。

「天地は過ぎゆかん、然れど我が言は過ぎ逝くことなし」

と。「御言は過ぎ逝くことなし」ということは、

「御言は必ず実現する」

ということです。

「神さまの言は真理として観念的にただいつまでもある」

ということではない。

「我が言は移ろつていかないで、それが必ず実現していく」

ということ。この実言は実現する。キリストの言は空言でない、実言だから、これは実現する。聖書の言葉がそのような実力をもった実現の実言ですから。プロテスタントでは、

「御言、御言」

とよく言うが、ただ勿体ぶっているのではない。聖書の言葉は、読めばそれが直ちにわがうちに実現しなかったら、御言は読んでやしない。必ず実現していなくては。そして、それが相対的現実においても、時あつてか実現するだけのほしだ。深い現実では、聖書を読めば直ちに、わがうちにその現実は開示してくる。それでなければ、言葉は食らっていない。

「言葉を食らう」

とは、その言葉の事態が自分の魂の中で現象している、現実となつていくということです。

「終りまで耐え忍ぶ者は救わるべし」

というのを、

「終りまで、さて、私は果たして耐え忍ぶでしょうか」

なんて思っているのは、それは聞いてない、読んでない。

「終りまで耐え忍ぶ者は」



と言うときに、

「私は終りまで耐え忍ぶ者である。キリストの御霊によつて、霊生によつて、私は終りまで耐え忍ばないではられません。そういう者でございます」

ということをはつきり、キリストのご恩寵の故に言えていなければ、これは読めていない。そうでなかったら、この言葉は力とならない。

「はあ、終りまで耐え忍ぶとは、どうしようかな」

なんてでは。また、大いに意気込んで、いわゆる人間的な意気込みで、

「終りまで耐え忍ぶぞ」

なんて言つて一生懸命で讃美歌を歌つていて、この集会からさっさと逃げて行つた人もある。そういう、人間的な決意とか、そんなものは当てになりません。問題は、この御言が祈りの世界で、御霊の世界で自分のうちに事実となつていくかということです。そしたらば、必ずそうなっていく。

「祈りたることは聴かれたとせよ」

ということは、

「祈つたことを既に事実とせよ。そうすれば、実現していくぞ」

ということですよ。神さまは、自分を棄身で祈っていく人を決して棄てない。

皆さん、どうですか。そういう意味で、本当に私たちは幸いな現実の中にある。

「天地は過ぎゆかん、然れど我が言は過ぎ逝かじ」

「我が言の成る天地は来るぞ」

ということです。

「いわゆる天地は過ぎゆく。罪の世の天地は過ぎゆくだろうが、我が言の天地、新

天新地は成っていく。汝らのうちに既に新天新地があるではないか」

と。これはいわゆる現実主義でもなく、いわゆる理想主義でもない。私たちの中に本当の現実と本当の理想が現象しているわけだ。本当の終末の希望が希望として、最も輝かしい希望を私たちは持っている。だから、クリスチャンの顔は何ものよりも輝かしくあるべきです。

キリストは十字架にかかつて、悲しみの人にして悩みを知れりという。昔は、無教会で私が教わった頃は、

「十字架、十字架」

と言つて、悲哀ということが何かひとつのクリスチャンの大事な要素みたいだった。本当の悲しみは、神さまと共に――呻きのような、深い悲しみと言いますか――それは持っていますよ。しかし、それが持てるのは、それにはるかに勝るところの素晴らしい輝きの世界、天国を持っているからです。

「今日、汝、我と共にパラダイスにあり」



と言う。どんなにみすばらしく見えても、どんなに行き詰まったように見えても、

「一切の秘訣を得たり」

というのは、

「現にパラダイスにあり」

ということです。泣いている顔の奥に、実は水の如き輝きを持っている。それが本当のクリスチャンだ。それは御霊が来なければ、この勝利というものは——これは決定的勝利です——この勝利は来ない。どうか、これからのまた一週間もそのつもりで、本当の輝きをもつて進んで行きましょう。

●神秘の世界

³² その日その時を知る者なし。天にある使者たちも知らず、子も知らず、ただ父のみ知り給う。

「ただ父のみ知り給う」と言う。だから、いい加減な預言なんていうものに惑わされることはない。

こないだ私のところに、知らない人から、

「あなたはお分かりですか。来年の9月は世界の終りですよ」

なんて、とんでもない手紙が来た。私は返事も書かない。

世界の終りはいつでも来ますよ。神さまが、これを来させようと思ったら、いつでも来る。祈りの世界では、或る時が危機というようなことは示されるでしょう。けれども、キリストも使徒たちもそのことを間近に見ながら、神さまの方ではその計画を変えなされたわけです。だから、軽々しくそういうような時期的な預言なんかはするものではない。イエス・キリストも間近と思いましたが、しかし、最後の事において、

「父のみぞ知りましたもう」

と言われた。

³³ 心して目を覚ましおれ、

大事なことは、目を覚ましていること。

汝らその時の何時なるかを知らぬ故なり。

「盗人のごとく来る」なんて、別なところで書いてある。

³⁴ 例えば家を出づる時その僕どもに権を委ねて、各自の務を定め、更に門守に目を覚ましおれと、命じ置きて遠く旅立ちしたる人のごとし。³⁵ この故に目を覚ましおれ、家の主人の帰るは、夕べか、夜半か、鶏鳴くころか、夜明けか、いずれの時なるかを知らねばなり。³⁶ 恐らくは俄に帰りて、汝らの眠れるを見ん。³⁷ わが汝らに告ぐるは、凡ての人に告ぐるなり。目を覚ましおれ』

私は今朝は朝四時に起きて、伊東の海岸に立って——静かだったなあ——海辺で祈って



きた。ちょうど中学一年のとき、伊豆の伊東で夏を過ごした時に、夜明けに金環食——お天道さんが日食を起こしてそれが金の環になった——それを見たことを、今朝も想いだした。太平洋の波と、大洋と共に——本当に静かな海だったからね、渚もほとんど波の音がしないくらいです、サラサラ、サラサラと——何か非常に深い、ちよつと不思議な祈りの境地に入られて、感謝しております。イエス・キリストと大自然は祈っているなあと思つた。パウロが、

「万よろずのものが呻うめいて祈いのちっている」

とローマ書8章に書いていますが、正にそのようなわけです。しかも、大洋は、呻きばかりでなくて、何か非常に深い力強さを持っている。

神の世界は、さっきの「神」という字が雷でしたが、正に雷なんだ。もの凄い電光と共に、実に静かな神秘の世界です。祈りの世界で、私たちは、キリストの御言が祈りにおいて深く——もう解釈ではない——身につかなかつたら、聖書の研究なんかいくらやったってダメです。どうか、皆さんは本当に祈り深い人になっていただきたいと思ひます。

それが、

「目を覚ましおれ」

ということ。ただ目を覚まして、徹夜することではない。祈りをもって、祈り心であるということが、「目を覚ましていゐる」ということ。心の目は祈りである。その点で、私が育つてきた無教会は祈りが足りなかつたね。集会では、みんな立派な祈りはするんだ。けれども、本当の意味においての祈りの世界は、どうでしょうか。この頃書いていゐるものを見ると、聖霊のことをちよこちよこ言っているけれども、聖霊のバプテスマということが我々の信仰の大事なものであつて、これがなかつたならば成り立たないというところまではつきり誰も言わん。

どうか、皆さんは、大事な福音の世界に今、進みつつあるのですから、一切のものに棄てられようが、終りまでキリストと共に耐え抜き——本当に耐え抜けるんですよ——勝利の生涯を進んでください。このマルコ伝13章は、何か終末的現実で、世の終りみたいなことが書いてあつて、縁遠いような何かちよつと妙な話のようだけれども。20世紀の現在というものが決して安閑たるものではない。サタンの要素がいろいろ働いている。キリスト教国といへどもダメです。

私たちはイエスと共に、使徒たちと共に、そのような現実を突破できるところのキリスト者として、どこまでもキリストの御名を拒まず、はつきりものを言う。そして、天地は過ぎゆくけれども、神の国は実現する。御言の事態は、聖書の事態は実現する。実に、我がうちに実現しつつあるということを喜び受けとりながら、本当に輝かしい、絶対の勝利をいただいて進んで行くというわけです。

